

1. 夏秋小ギクの電照抑制栽培における再電照による花房形状の品質向上

[要約]

夏秋小ギクの電照抑制栽培において、「はるか」は消灯2～4日後、「すばる」は消灯4～6日後から再電照を8～20日間行くと、花房長が伸長し、花蕾数が増加することで品質が向上する。この効果は再電照期間が長いほど顕著である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター 農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

近年、電照による開花抑制効果が高い夏秋小ギク品種が育成され、電照を用いた計画生産が概ね可能になってきた。しかし、電照栽培すると切り花のボリュームが不足する場合がある。一方、秋ギク型品種では、消灯数日後から再電照を行うことで切り花のボリュームが向上する。そこで、再電照による夏秋小ギクの切り花ボリュームの向上技術を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. 電照による開花抑制効果が高い品種を用い、6月20日に消灯すると、8月に開花するが、慣行に比べて花房が短くなり、花蕾数は減少する。
2. 6月20日に消灯し、「はるか」では消灯2～4日後から、「すばる」では消灯4～6日後から、再電照を12日間行くと、花房長が長くなり、上位側枝の花蕾数が増加する（図1）。
3. 6月20日に消灯し、消灯4日後から、再電照を8～20日間行くと、電照日数が長いほど、両品種とも花房長が長くなり、上位側枝の花蕾数が増加する（図2）。
4. 再電照を行うと、開花が遅れるため、再電照日数に合わせて、基本となる電照抑制栽培の消灯日を早める必要がある。たとえば、「すばる」で消灯6日後から8日間の再電照によって開花が6日程度遅れるとすると、無再電照より6日程度消灯日を早め、6月5日頃とするのがよいと推察される。

[成果の活用面・留意点]

1. 白熱灯を用いた、深夜4時間の暗期中断で再電照を行った結果である。
2. 品種、消灯日および栽培地によって、適切な再電照開始日は異なる。

[具体的データ]

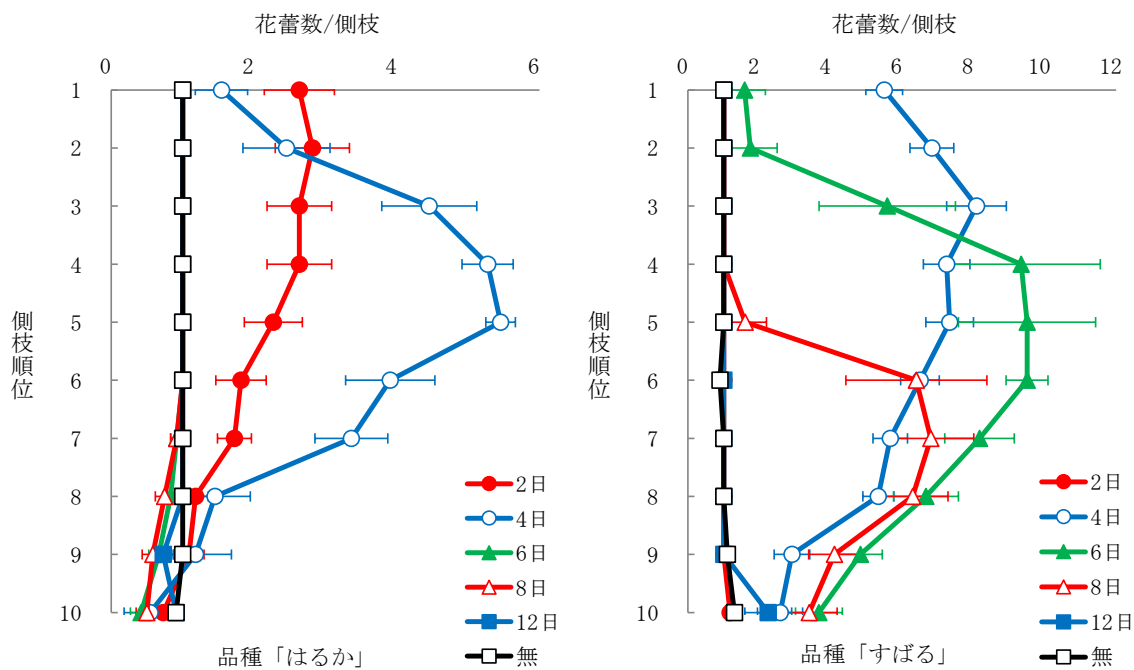


図1 電照抑制栽培における消灯後の再電照までの日数が側枝当たり花蕾数に及ぼす影響
注) 再電照は12日間

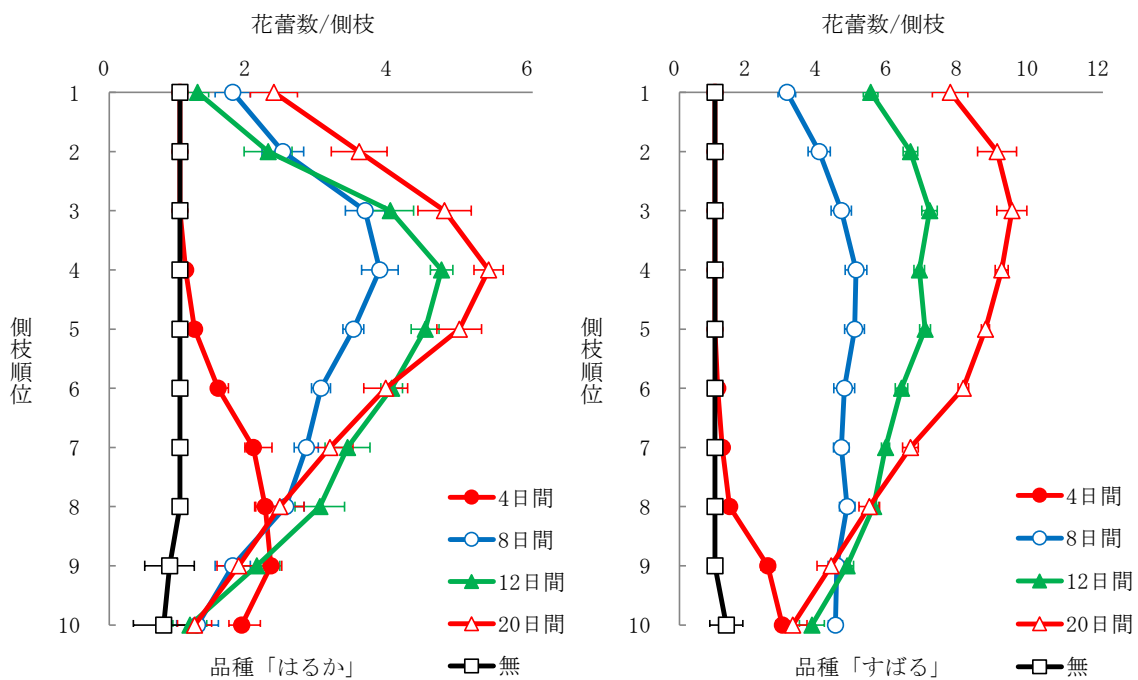


図2 電照抑制栽培における再電照日数が側枝当たり花蕾数に及ぼす影響
注) 再電照は消灯4日後から

[その他]

研究課題名：周年安定生産を可能とする花き栽培技術の実証研究

予算区分：受託（先端プロ）

研究期間：2013～2017年度

研究担当者：森 義雄